

基調講演

「公共図書館は『第三の場』たりうるか」

講師：神戸女子大学准教授 久野 和子

1 はじめに

電子書籍やインターネットの普及に伴い、1990年代からアメリカを中心に図書館消滅論が論じられてきた。それに対抗する考えとして、「場」としての図書館を目指す動きが始まっている。

2000年代には社会学や文化人類学などの理論から新しいタイプの図書館研究が見られるようになり、「図書館の中の生活における利用者」ではなく「利用者の生活の中における図書館」に焦点を当て、実際の利用者が図書館という場でどのような行動をとるか、という利用者目線の図書館づくりが求められている。

2 「第三の場」とは

第三の場とは、社会学用語で「堅苦しくない公共的な集まりの場」、「日常生活におけるたまり場、居心地の良い場所」であり「生活を豊かにしてくれるもの」とされる。アメリカの社会学者オールデンバーグが提唱する良き「第三の場」の特徴には、中立地帯であること、アクセスしやすく、協調的であること、もう一つの家のような場であること、会話を主要な活動とし、遊び場的な雰囲気があることなどが挙げられている。

中でも「会話」と「遊び」の要素は、地域社会を構成する主体であり、無限の可能性を持つ生涯学習者である子どもにとって、多様な人との出会い・交流をもとに文化の基盤を形作ることにつながるため、重要であるといえる。同時に子どもにとっては「休息・余暇」や「文化的生活・芸術への参加権」も必要な要素であり、これらを保障することが生きるエネルギーとなり教育・学習の土台となる。

デンマーク・オーフスの図書館「DOKK1」では、ゲーム機や卓球台、ボードゲームを使って楽しめるプレイルームがあり、子どもが自由に遊び、文化を育め

る環境となっている。また、オランダのアムステルダム中央図書館では、入口にピアノがあり誰でも利用できるようになっていたり、ソファや大きな窓などがあつたりと開放的でくつろげる雰囲気があり、自然と会話、交流が生まれる場となっている。

日本には「会話」や「遊び」、「休息」などの要素を取り入れている公共図書館はあまり見られないが、海外ではこれらの事例のように、良き「第三の場」の特徴を備え、子どもの文化権を意識した新しい公共図書館が生まれている。

3 「第三の場」としての図書館

「第三の場」は個人にとっては会話技術の向上や多種多様な人々との社交の楽しさ、帰属意識などの精神的な支えをもたらす、社会にとってはコミュニティの安全・秩序・活気を支え地域の活性化をもたらす。

オールデンバーグの研究では、公立図書館は「第三の場」の候補となっていない。しかし、図書館は人との共感・モノとの出会い・コトの共同体験を生み、「屋根のあるひろば」として様々な人が自由に出会い共に学ぶ、自由で協働的な学び（生涯学習）の場となりうる。

また、「第三の場」を支える基盤は居心地の良い場を維持管理する「第三の人」（Public character）の存在である。地域のこと、人々のことをよく知り、情報と人を結びつけることができる図書館員の存在は、図書館が「第三の場」となるための重要な要素である。



▲基調講演

そして、図書館が「第三の場」となることで、社会関係資本を創出することが期待されている。社会関係資本とは、信頼に基づいた人と人とのつながりであり、地域社会の発展や政治、経済、福祉、教育等を十分に機能させるのに必要不可欠なものである。

同時に図書館は、豊かな蔵書と文化的な環境を備え、公共のマナーを身につけることができる場として、文化資本を生み出す可能性も持っている。これらの資本を創出することが、近年問題となっている子どもの貧困や格差を是正する鍵となる。

4 これからの図書館

小規模でより身近な図書館、地域に密着した図書館、学校図書館などは地域社会と密接にかかわるため特に重要となってくる。アメリカ・シカゴ公立図書館は様々な人が集い、人種や貧富の差を超えたつながりを生む場として、参考となる事例といえる。

また、これからの図書館は、静かに読書や勉強をする場、メーカースペースなどの創造する場、会話や交流する場など、相容れない場を包括したエテロトピ（混在郷）となり、多様な空間と場を提供することが求められる。

地域のつながりが希薄な今、それをもっとも効果的に創出できるのは、あらゆる人々が身近に集える図書館である。そして、住民の幸福な日常生活と豊かな生涯学習を支え、地域社会を活性化する「第三の場」の創出は、図書館の重要な使命であり役割であるといえる。